豚の報い

又吉栄喜

文藝春秋

又吉栄喜（またよし・えいき）
一九四七年、沖縄・浦添村（現浦添市）生まれ。
一九七〇年、琉球大学法文学部史学科卒。
一九七三年、浦添市役所入所。
一九七五年、「海は蒼く」で
新沖縄文学賞佳作。
一九七六年、「カーニバル闘牛大会」で
琉球新報短篇小説賞受賞。
一九七七年、「ジョージが射殺した猪」で
九州芸術祭文学賞最優秀賞受賞。
一九八〇年、「ギンネム屋敷」で
すばる文学賞および
沖縄タイムス芸術選賞奨励賞受賞。
一九九六年、「豚の報い」で
第一一四回芥川賞受賞。
現在、浦添市図書館勤務。
著書に『ギンネム屋敷』（集英社）、
『パラシュート兵のプレゼント』（海風社）。

豚の報い

一九九六年三月一日　第一刷
一九九六年三月二十日　第三刷

定価はカヴァーに表示してあります

著者　又吉栄喜

発行者　湯川豊

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

©Eiki Matayoshi 1996　Printed in Japan

ISBN 4-16-316210-0

万一、落丁、乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

1100円

目次

豚の報い　5
背中の夾竹桃　121

装丁　中島かほる
装画　田中一村
カヴァー・表紙「奄美の杜⑥」
扉「熱帯魚三種」
（『田中一村作品集』NHK出版刊より）
口絵撮影　國吉和夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

豚の報い

豚の報い

1

豚の、スナック「月の浜」への闖入が正吉と三人の女を真謝島に向かわせている。四人は今、渡し船を待っている。豚がもたらした厄を落とすための真謝島行きが決まった三日前の水曜日から正吉はピップエレキバンを二個首に貼っていた。だが、首はまだこわばっている。スナック「月の浜」のママのミヨとホステスの和歌子と暢子は真謝島遊漁船組合とか、オリオンビール代理店とかの看板が出ている切符販売所にたむろし、赤や紫にぬった唇を大きくひらき、笑いあっていた。和歌子と暢子はサングラスをかけ、つばの広い帽子をかぶり、暢子は赤いショルダーバッグを、和歌子は小さなトランクを持っている。売店の中年の女も、自転車をひいている少年も、初老の男も三人の女たちを見たり、琉球大学一年生の正吉を見たりした。正吉は彼らの目から逃れるように座り込み、無数のガラス

の破片に光がはじけているような海面を見た。
和歌子と暢子が焼き芋を買うために黒い煙突のついた軽自動車を追いかけていった隙に、ミヨがバニラアイスクリームを食べながら足早に正吉に近寄ってきた。口紅が白いバニラアイスクリームにくっついている。ミヨの少し厚めの唇は色がおち、妙に弱々しかった。ミヨは黒いロングスカートを足にはさみ、正吉の正面にしゃがんだ。
「私、隣の人に、女ともだちの葬式にって出てきたのよ」
ミヨは上目遣いに正吉を見る。「嘘ついたら、功徳はないかしらね」
「いや、たぶん……」
「たぶん、何なの？」
「……あります」
「正吉さん、これチップ」
ミヨは一万円の入っている小さい封筒をとまどう正吉の白い開襟シャツのポケットに押し込み、立ちあがった。「いいのよ、いいのよ。みんなには内緒ね」
ミヨは足早に切符販売所に戻った。
「正吉さん、焼き芋買ったから、船に揺れながら食べましょうね」
戻ってきた和歌子が声をはりあげ、紙袋を大きくさしあげた。
沖縄本島中部の細長い半島の先にこぢんまりと固まっている勝連（かつれん）村の小さい港には、漁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

船もボートやヨットも繋留されてなかった。正吉は対岸の真謝島と日に三往復するという船がほんとうに現われるのか、疑ったが、まもなく、アダンやソテツが隆起珊瑚礁の岩に食い込むように生えている小さい岬の陰から船が出てきた。機関の音が大きくなった。ランニングシャツを着、つばの短い船員帽をかぶった、色の黒い男が操舵室にいる。切符販売所の建物の陰の中から女たちが騒ぎながら出てきた。和歌子は白いスラックスをはき、濃いグリーンのティーシャツから出たほっそりとした白い首には数珠に似たネックレスをしている。赤いスカートをはいた暢子はチューインガムをかんでいる。白い光の中に赤くくっきりと描いた細い唇が別の生き物のように動いていた。ミヨは黄色と白のストライプのはいったパラソルをさしている。

三人の女たちの笑い声が消えた。黒いワンピースを着た二人の老女が船室から出てきた。後から出てきた三人の老人も大きめの黒い背広を着、黒いネクタイをしめている。黒い着物の老女を両側からささえている二人の中年の女も黒いワンピースを着ていた。

「葬式の帰りかしら？　今から行くのかしら？」

和歌子が言った。

「帰りなら、ほっとしているでしょうよ、表情が……」

六歳年上の暢子が、背の高い和歌子を見上げた。十三年前、六歳の時に真謝島を出た正吉には見覚えのある顔はなかった。一行は押し黙ったまま甲板から桟橋に渡り、ゆっくり

と去った。ヒールや革靴の音だけが変にはっきりと聞こえた。
正吉たちや初老の男や自転車の少年も船にのりこんだが、船頭や商店主はまだ清涼飲料水のケースや日用雑貨の段ボール箱を船に積み込んでいる。十八トンの鉄製の船は揺れる。船の影の落ちている水面を正吉は見た。透明な水に汚れたくらげのようなビニール袋が何枚も浮き、沈みながら漂っている。正吉は妙に意地になった。四、五メートル下に沈んでいる缶ジュースの文字を読もうと目を凝らした。水中は揺らめいている。正吉は気分が悪くなった。だが、我慢したら、読めた。
水が後方に動いていると正吉は錯覚した。船は水を割り、動きだした。正吉の両脇の白い波が自分におおいかぶさるような気がした。胃が蠢き、胸から咽に何かがこみあげてきた。ウオオオッという自分の声ではないような音が口からもれた。
「冗談？」
暢子がしゃがみこみ、正吉の顔をのぞきこんだ。
「顔、真っ青よ、本気よ」と和歌子が言い、強く正吉の背中をさすった。「船酔いよ、ママ」
「お酒にはあまり酔わないのにね」
「大任を抱えているからよ、リラックス、リラックス」
暢子が正吉の肩をたたいた。
「私は三日乗っても酔わないわ」と和歌子が言った。「頑張って、正吉さん」

「よしなさい、酔うとかの話、酔うと聞くだけでも酔うのよ」
ミヨが声をはりあげた。正吉は耳も痛くなった。しきりに唾液が出る。三人ともどこかに行ってくれと内心叫んだ。
「誰か梅干し、持っていない？」とミヨが言う。「レモンでもいいけど」
「レモンスカッシュの飲み残しがあるけど、飲ましてみようか、ママ」
ミヨがうなずくのが正吉はわかった。和歌子は立ちあがった。正吉は吐き気をこらえ、座りなおし、胸を張った。
「治ったよ。少し静かにしたいから……」
「だいじょうぶ？」
ミヨが正吉の顔をまじまじと見る。和歌子がミヨの手を引っぱった。
「ママ、行きましょう。男の人の苦しむ顔をあんまり見るもんじゃないわ」
珊瑚礁の原を外洋に出た船はうまく水にのり、一定の方向に揺れるようになった。正吉は力をぬき、背中を船壁にもたせかけ、たてた両膝に手をまわし、揺れに体をあずけながら、ぼんやりと水平線を見た。甲板の中央のベンチに座った三人の女は肩を寄せ合い、しきりに笑いながら船のエンジン音や潮の音に負けずに話し合っている。
正吉の目には遠くからくっきりと見えていた真謝島が船が近づくにしたがい、白い砂浜や桟橋に光が乱反射し、ぼやけた。

正吉が生まれた真謝島には御嶽（ウタキ）という霊場が方々にあり、俗に「神の島」と呼ばれている。沖縄でも珍しいのだが、風葬地もある。現在は風葬の習慣はなくなったが、正吉の父の骨はまだ風葬にされたままになっている。

正吉の足元の青っぽい紺色の水が重々しくうねっている。船はうねりを裂き、微妙に青い色を映した白い波が勢いよく立ちあがる。女たちは立ち、真謝島を見ている。不様な姿を見せてしまった。正吉は小さく舌打ちした。御願（ウガン）まわりの案内人というのはいつ、どのような時でも泰然自若としていなければならないのに。正吉は立ちあがった。だが、まだ吐き気は残っている。しかたなく静かに座りなおした。

船は環礁に入った。青い水面に光の輪がゆったりと揺れながら、煌めいている。女たちがゆびさしながら騒ぎだした。「綺麗な珊瑚。赤紫が綺麗ね」「私は黄緑が好き」「磯巾着ね。海星（ひとで）もいる、いっぱい」「熱帯魚もいっぱいいる」「海鼠（なまこ）は気味悪いね」

正吉の頭はまだぼんやりとしている。無事に女たちを御嶽に案内できるか、ふいに心許なくなったりする。女たちの声高な話は海風に巻かれ、船いっぱいに満ちている。

一人おとなしく父の骨を拾いに真謝島に来ればよかった。スナック「月の浜」や自分が入居しているアパートのある浦添市から東に四十分車に乗り、勝連村の小さい港から更に東に半時間渡し船に揺られたら着く、日帰りもできる近い距離なのにと今になって正吉は後悔している。父の骨を拾うだけでも気が重いのだが、豚が闖入した時、咄嗟に真謝島に

御願に行ったら豚の厄が落ちる、と口走ったために三人の女たちを案内しなければならないはめになり、ますます気が重くなっている。

2

開いていたスナック「月の浜」のドアから荷物が転がってきたと最初正吉は思った。カウンターに座っていた正吉は足を何かにつきとばされた。足元を見ると六十キロはくだらない、白い豚だった。正吉は驚き、椅子が傾き、ひっくりかえり、ソファの角に頭をうった。カウンターの中の女たちが悲鳴をあげた。すると、豚はさらに魂をなくしたかのように走り回った。女たちは「正吉さん、追っ払って」、「早く、早く」と騒ぎ、豚はますます狂った。正吉は両手をひろげ、足を踏み鳴らし、しっしっと声を出しながら、豚を追い詰めた。豚は正吉の足元からカウンターの中に入った。「何なの！」、「誰なの！」と大声を出しながら女たちは逃げまどった。ミヨはすぐカウンターから出、暢子はカウンターの上にとびのった。和歌子はカウンターの隅に体をちぢめるようにしゃがんだ。豚は荒い鼻息をたてながら、大きな鼻をこすりつけるように和歌子の体の匂いを嗅いだ。和歌子は声にならない悲鳴をあげ、手足を激しく動かした。正吉は小さい丸い椅子をふりあげ、豚を威嚇した。しかし、豚は和歌子が気にいったかのように、体をのせかけようとした。正吉は

椅子を豚の背中にふりおろした。豚は正吉に向き、憎々しげに醜い歯を見せ、カウンターの外に出、つぎつぎと四本の鉢植えの観葉植物を薙ぎ倒した。正吉は大声を出し、椅子をふりまわし、必死に追いはらった。豚は軽々とシートを飛び越え、なおも激しく鼻を鳴らしながら床や壁を嗅ぎ回ったあげく、ドアを出た。正吉はすぐドアを閉めた。暢子が近づいてきた。

「……もう、いない？　正吉さん」

正吉はドアを少し開け、顔をのぞかした。外は変にざわめいているが、豚の影はなかった。

「開けないで」と暢子が言った。「和歌子が魂落(マヌケ)としたのよ」

正吉は周りを見回した。

「ここよ」

ミヨがカウンターの中から手を振った。和歌子は胎児のように体をちぢめ、小刻みにふるえていた。顔は赤い明かりを浴びていたが、変に青白かった。目は見開き、唇からも色がぬけていた。正吉は足がふるえた。日頃気丈夫な暢子もおちついたミヨも和歌子の体には触れずに、大声を出し、和歌子の名を呼んだ。顔から血の気が引いた正吉は我を忘れた。名を呼びながら、和歌子の肩をゆすった。

ようやく、和歌子の肩から力がぬけ、目がまばたきを始めた。顔色もほのかに赤みが戻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com